

平成22年度資源評価調査 岩手県におけるブリ0・1 歳魚アーカイバルタグ放流調査計画

目的: 岩手県海域におけるブリの成長に伴う回遊様式の解明

平成18～20年の秋、大船渡市越喜来漁業協同組合のご協力により、アーカイバルタグを装着したショッコおよびワラサを放流することができた。平成18年11月には、尾叉長(FL)36-39cmのショッコ10個体を放流し、5個体を回収した。平成19年11月には、FL 34-39cmのショッコ10個体を放流し、3個体を回収した。平成20年10月には、FL 52-57cmのワラサ11個体を放流し、7個体を回収した。これらから得られた位置情報、水温・水深データから、今のところ次のような回遊の実態が明らかになりつつある。

0歳(ショッコ)・1歳(ワラサ)とも、水温の低下とともに南下する。この時に北上した個体は1個体も確認されていない。冬の間、未成魚は外房から常磐沖で越冬する。今のところ、外房を越えて西に向かった未成魚は確認されていない。春以降の水温の上昇にともない、仙台湾や三陸まで北上するものと、外房から常磐海域に居着くものがある。津軽海峡を越えて日本海に入ったと思われる個体は確認されていない。放流から再捕までの期間が最長の個体は、平成18年11月2日に放流したショッコ(FL 39cm)で、平成20年6月26日に千葉県南房総市千倉の白子定置網で再捕されたもの(FL 76cm)であった。放流から再捕までの期間は602日であった。この個体は再捕時に2歳+であり、この時点までに生殖に参加したことがないと考えられた。

越喜来沖から放流したもののうち、成熟後に再捕された個体はいまだない。すなわち、三陸沖から外房の海域で育ったブリが、成熟年齢に達した冬から春にどこまで回遊して産卵を行うのか、いまだ明らかではない。このため、越喜来沖からのブリ未成魚の放流を継続する必要がある。

放流対象と個体数

ワラサ(なければショッコ)10 個体

実施日

平成22年10月25～29日の間の1日、または11月9～12日の間の1日

場 所

越喜来湾湾口部のニツ水(ふたつみず)または小壁(こかべ)定置網

協力漁協

越喜来漁業協同組合(JF おきらい)

方法

- 1 定置網の通常操業にあわせて、調査員は定置網漁船に乗船する。
- 2 漁船右舷側の舷側・魚倉・立板で囲まれた空間(写真)にブルーシートを利用して水槽を作る(写真)。
- 3 漁獲と同時に放流魚を水槽に收容してもらう。
- 4 海水とともにビニル袋に收容した放流魚を固定して、測定板上で尾叉長を測定する。
- 5 ビニル袋に入った放流魚を手術台上に載せ、開腹して腹腔内にアーカイバルタグを挿入し、縫合する。
- 6 背鰭両側に目印となるダートタグを装着する。
- 7 ブルーシート水槽に放流魚を戻す。
- 8 操業終了後に定置網よりやや沖の水域に移動し、放流する。
- 9 岩手県水産技術センターは、放流魚と同じ群れの10 個体を持ち帰り、精密測定を行う。



(平成 18 年実施時)